

薄幸の小姓（その5）

トリスタン・レルミット

野池恵子訳

40. 薄幸の小姓が、錬金術士の近況を知るために出した命令について、そして砂糖入りオムレツに、毒がいかにして盛られたか。

それから数日後に私は、ロンドンから郵便を受け取りました。私は前もってひとりの外国人の姿かたちを口頭で説明しておき、その外国人が商人の家に投宿したらすぐに私に知らせるよう、ある男に頼んでいましたが、その男がこの便を利用して、さっそく第一報を入れてくれました。男の知らせによると、一家の旦那様はプリマス^①にでかけ、一隻の船に帆をたて、そこからイギリス人の住むニューフランス^②に行こうとしている、ロンドンには旦那様の父上がとどまり、商売の采配をふるっている、という話でした。また、男が目星をつけていた知合いたちが、私の願いどおりに尽力してくれそうだ、その知合いたちが商家に夕食に招いてもらえないかとの男は、目星をつけた翌日から考えていた、というのです。くだんの錬金術士を、商人の家に投宿したときに必ずつかまえるためには、それはよい方法に思えました。男はさらにこう記してきました、彼が、私の主人の叔母上のところの下男たち何人かといっしょになった時、そのなかにいた小姓から、小姓自身の手紙とともにある一通の手紙を、私あての包みに入れてほしいと懇願されたと。しかしこの一件は、私にはまったく気に入りませんでした。あの男は私のことを商人に話してしまったのではないかと心配になりました。商人がここでの私の苦勞を台無しにするのではないかと、あの嫉妬深い粗暴な商人はなにがしかの口実をえて、いわれない復讐に走るのではないかと不安でした。しかしながら私は、送られてきた主人の従姉妹の手紙の封を切りました。それはつぎのような文面でした。

恩知らずな異国のかた、

私は好意をあなたに、あまりにもはっきりお見せしてしまったのでしょうか、あなたは私に謎を投げかけるばかりで、お返事をくださいません。私があなただけを、お顔の美しさから愛したというなら、あなたは私の愛情など蔑ろにできまじょうし、卑しいものではないかとお疑いになれまじょう。ですが、私に熱意を生じさせたのはあなたの精神なのですから、この熱意は、純粋な愛の炎とお考えになることができるのです。あなたはこのことについてどのようにご想像なさってもかまいません。ですが、紳士ならどなたでも私たち女性にささげる敬意をもって、想像なさるべきでございます。私の誤りはお忘れになるようお努めください、私も、あなたのを忘れるようにいたします。そして、あなたが私にはらうべき敬意を蔑ろになさるなら、それは私があなたのお命をいただく機会を手に入れたことだとお受けとりくださいませ。

この手紙を読んで私はかなりいらだちました。私は主人に少しこびすぎていたことを、お恥ずかしながら認めさせられたのです、自分の主人にそのような振舞いをすれば、かならずや当然と言える非難をまねくものなのです。ただちに私は無作法なやりかたを明らかにする手紙を抹殺し、主人には、使者の手紙に書かれていたことの一部を口頭で伝えました。手紙は、良い知らせがなかったのがいまいまして、ちりちりに破いてしまった、と主人には信じさせました。ところが、私はその午後じゅう憂鬱にしていたので、主人はおやつを命じた時、砂糖いりのオムレツを、なかに必ず含めるよう注文をつけました、私の好物なのを知っていたからです。が、この役目を言いつかったおつきの女性は、それが私ひとりのものだとすることを強調しすぎたと思われます。ともあれ主人のおつきの女性たちは食膳係になって洞窟の大理石の食卓に、食器を並べました。そしてそこには果物や菓子の皿が8皿、10皿もおかれ、砂糖いりのオムレツも忘れずに用意されたのです。実はこのオムレツは、忘れさられるべきものだったのですが、私の主人は世界じゅうでもっとも優美な風に笑いながら、これからちょっとした舌の楽しみを味わいたい、あまりにもすてきな気分なので私の憂鬱が長続きするのは許したくない、と声高に言いました。また彼女の意見によると私は脾臓の病気にかかっている疑いがあるので、彼女のために乾杯して私の脾臓を極上のビールで満たしたいそうでした。主人のお気に入りの侍女はこの病気に非常にかかりやすく、医者^⑨の忠告でタマリンドの木でできた小樽から酒を飲んでいましたが、その侍女が私に彼女の小樽を使うよう勧めてくれました。こうして私たちの密やかな楽しみは上機嫌のうちに始まりましたが、実は同じ上機嫌で終わりませんでした。私は、私のために用意されたオムレツを少々食べたたん、甘さのなかに焼けるような感覚をおぼえたのです。この食べ物で喉と胃が火で燃え上がるような感じがし、飲み物を飲んだだけでは消せませんでした。主人の健康にたえず気を配っていなければならなかった私の方が、ひどく気分が悪くなってしまったのです。しかし私の目にはこの集いに疑わしいものは何も映りませんでした。こんなに良い仲間たちのなかに、悪事を企む者がいるとは考えもおよびませんでした。しかし、ちょっとした事件が起きて、事の全貌がもっとよく見えるようになったのです。私の主人は、私のかわいい子と常々呼んでいたとても可愛いらしい小犬を膝の上に置いていて、この犬に、私のオムレツを与えました。が、この食べ物は、かわいい子犬には少々手厳しいものでした。というのも小犬は、主人の胸のなかですぐに死んでしまったからです。この事件で私たちはみな不安に陥りました。私は、私の打ちあけ話の聞き役だった主人のお気に入りの侍女に、小声でささやきました、私もオムレツを食べてひどい目にあった、これは私の敵たちの新しいやり方だ、と。ところが彼女は秘密の重大さを考えもしないで、主人にただちにこれを打ちあけてしまいました。あらたな動揺がおこり、最初のが忘れられました。考えなくてはならない緊急の問題は、薬を服用しなければということでした。これは私が自分で所持していたので、遠くまで探しにいかなくてもすみました。最初に毒を盛られた時に私の命を守ってくれたあの薬が、まだ三、四粒残っていたのです。この最高の解毒剤で命は救われましたが、薬はそれで最後でした。一方主人は、お気に入りの侍女とともに私に忠告をしました。彼女たちは、私が必要な決心をして非常に憎むべき陰謀をあばき、見せしめに罰を与えなければならないというのです。主人は、この計画の首謀者とその共犯者たちが誰かは、

はっきり想像がつくとも述べました。主人たちの目に怪しいと映ったのは家の料理人のひとりで、くだんの侍臣とは同郷でした。草原で乱闘騒ぎがあった時、この料理人は侍臣の友人だと声明したのです。料理人を告発し、侍臣ともども捕まえようということになりましたが、しかし最初に主人の母君の賛同を得てからにすることとなりました。この騒動は取り扱いが難しいので、母君にどのように訴えたらよいか、考えを要するところでした。母君は厳かで賢明な女性でしたから、暴力で彼女を動かすことはほとんど不可能に思えました。

41. 薄幸の小姓はどのようにして自室で暗殺されかけたか、また彼が閉じこめられた牢屋について。

この事件で私の美しき主人はすっかり動揺してしまい、私に自室に下がって連絡を待つよう命じました。そして死んだ子犬をハンカチに包み持ち、お気に入りの侍女につきそわれて母君に会いに行きました。彼女たちが母君にどう話したかは私にはわかりませんでした。私によくわかったことは、彼女が家じゅうに一大騒動をひき起こしたことでした。しばらくして、私に仕えるアイルランド人がひどく興奮して部屋を訪れました。彼はすぐに扉を閉め、私に用心するよう注意してから、例の敵が私を破滅させると言っていると教えてくれました。彼は緊張してこう述べると、護身用に、ピストルに火薬をつめてテーブルに置きました。私はこの予期しなかった知らせにひどく驚かされましたが、それ以上に驚いていたのは、私の主人からくるものと期待した知らせが、まったく届かなかったことです。私はアイルランド人に事細かに尋ね、彼が私について聞いたことからつぎのようなことを知りました。すなわち、侍臣とその共謀者らが、毒を盛られた子犬の死をめぐって家で暴動を起したと、彼らの主張によると、私が、主人を毒殺しようとして子犬を殺したに違いない、それというもほかの誰かがやった様子は見あたらないから、というのです。また、ほかの召使たちはみな、一家に忠実で献身的な僕であり、たったひとりのお世継ぎのお嬢様を亡きものにしようなどという悪意を持つものはここにはいない、お嬢様の死で利益を得る幾人かの人びとから、私は買収されたに違いない、と彼らは加えて述べていたそうです。これらの細々した事実は私をひどく動揺させました。それらは良識に基づくものではなく、言い訳でしかありませんでした。どうすべきか考えていると、中庭から何かざわめきのようなものが聞こえてきたので、私は窓から顔をだしました。すると下に、10人、12人もの召使たちが、剣や焼き串で武装しているのが見えたのです。彼らはお互いに励ましあいながら私の部屋の扉を破りに来ようとしていました。しかし、私はこの場にあってもまったく分別を失いませんでした。私は即刻このことを主人かそのお気に入りの侍女に知らせよう下男に命じ、彼を室外に出したのです。それからすぐに部屋の扉を閉めて、できるだけ堅固にバリエードを築き中に閉じこめました。階下に見かけた男たちはまもなく階段を登ってきました。彼らは歩きながら、私を暴れさせずに取り押さえようと決めていたので、部屋の扉の前にたつてから、非常にもの柔らかにノックをしたのです。私は彼らのやり方を知っていたし、また、ひたすら時間をかせごうとしていましたので、沈黙を守りました。彼らは集まってこの事態について再び相談し、こう考えました、かなり小声でそれも英語で話しかけた、だから私には聞こえなかったかもしれない、と。結局、召使いのひとりで発音はちょっとおかしいがフランス語を話せ

る男が、それまでになかったほど強く扉をたたき、私の名を呼んで、奥様とお嬢様の命令により扉をあけるよう私に命じました。もし私が即刻あけなければ、彼らは扉をうち破る、と言いました。この話しを聞いたとたん私は怒りにかられ、あやうく身の破滅を招くところでした。というのも扉の前まで引きずって持っていった櫃を、私は今にもとり除いて扉をあけ、剣をつかんでならず者たちにかかっていこうとしたからです。しかし私はもっとうまい方法を考えつきました。その方が私にはおそらく有益だったでしょう。つまり、私は窓をあけてごろつきたちを大声で脅かし、彼らが集まっていた玄関のホールの方に向けて、持っていたピストルを撃ったのです。弾は誰をも傷つけませんでした。しかしかなり大きな音がしたので、家中が不安に陥りました。そして私に対して下劣な行為がしかけられたことを、家の各人が知ることとなったのです。私の大胆な振舞いは敵たちをあおりました。もし部屋の扉が丈夫でなかったら、まもなく破られていたことでしょう。それほど彼らは何度も扉を足で蹴っていたのです。私はピストルに弾をこめて、扉があくのを待ちながらある種の満足感に浸っていました。ちょうどその時突然、彼らが階段をまっしぐらに降りていくのが聞こえ、まもなく私の主人がこの騒動について母君に説明をする声が、聞こえてきました。部屋にたてこもった時もこれほど迅速に身を処しはしなかったでしょう、あのかたの心地よい声が私の耳に達するやいなや、私はもう扉をあけようとしていたのです。事実、主人が私を呼ぶとすぐに私は返事をし、扉をあけました。そして母君の足もとに身を投げ、正当なる裁きを求めました。善良なる夫人はとくに動揺することもなく私に、全員を正当に裁かなければならないと答えました。肘掛け椅子に腰をおろして彼女は私に騒動の原因が何であるか尋ねます。私はその件に関して、アイルランド人が私に教えてくれたことすべてを述べ、また母君自身がそれに質問を加えました。主人がずっと口をはさもうとしていましたが、母君は、娘があまりにも興奮していて分別ある話しはできないと判断し、沈黙を命じました。尋問が終わると、善良な夫人は私を彼女の住まいに連れていき、その控えの間に、私のためにベッドを用意するよう命じました。暴動を彼女が鎮めるまで、私を安全な場所に置こうというのでした。アイルランド人が、この部屋に私の櫃を運ばせました。また、何が起きようとこの部屋からけっして出ないようにという命令を、私は主人から受け取りました。私はこの事件で暗殺されはしませんでした。少なくともそれで幽閉の身にされてしまいました、それもかなり狭い場所に。

42. 薄幸の小姓の主人の母君は、どうして小姓の意に反した行動をとり、暗殺者たちに罰を与えようとしなかったか。

夜の11時ごろ、私が追い求めていた財産を夢みながらまだ眠らずにいたときのことです。アイルランド人が部屋にきて扉をそっと叩きました。私はすぐに扉を半開きにあけ、彼の手から一通の手紙を受け取りました。その内容はこんなでした。

ある会合がひそやかに持たれています。ここで私のご主人様と私は、あなたをひいきにしたがっているのではないかという嫌疑がかけられています。そのため私たちには、内容の大半が知らされ

ていません。ですがあなたのお友達のみな様がたとえ命をかけることになっても、あなたにお仕えいたしましょう。それについてはご安心ください。それよりも、あなたがたまたま取り調べられることになった場合にあなたを破滅に追いやるものすべてを、すぐに、そしてうまく破棄してください。

この手紙が主人のお気に入りの侍女からきたものだということはまず最初にわかりました。まったく妙な書き方でしたがすぐに中より本質的なところを判読しました。私は即座に見抜きました、もし私が捕まるようなことになった時に物議をかますもので、うまく処分しておかなければならないものとは、主人から贈られた肖像画の箱、髪で作った腕輪、宝石類だということを。私は身につけていた肖像画をすぐにとりはずし、ジャコビアン金貨が何枚かと細々したものが入っていたはがねの小箱を取り出して、それをこの小箱の中にしまいました。そして小箱を私の下男のシャツで包み、まわりを紐でしっかり縛りました。終わると、忠実さについては信用のおけたあのアイルランド人に命じて、小箱をある回廊の先端の濠に面したところから投げ捨てさせることにしました。誰からも気づかれぬよう充分に用心するように申しつけましたが。またさらに、その晩は一睡もしないで夜明けを待ち、外にでる手立てを講じて、その小箱をもっと遠くに埋めに行くよう申しつけました。忠実なる召使は私の言ったことすべてを大変よく理解し、またそれらがどれほど重要なものかわかってくれました。彼は泣きながら別れの挨拶をし、その仕事をうまく成し遂げると断言してくれました。また、人がよそからたくさん家に来ていて、主人の母君の寝室に集まっている、そこには侍臣と料理人、彼らの仲間二人もいた、と私に別れぎわに教えてくれました。ところがそれで私は不安に陥ったのです。私がいま無実なのに迫害され、まるで牢に入れられたような状態であることから考えて、私の暗殺者たちや宿敵らと話しあいの場を持つという母君のやり方が、何故なのかわからなくなったからでした。

そのうち私にまた別の苦悩が生じました。半時ほどあとに、私は奥方様から呼び出されたのです。私は彼女の面前に連れて行かれましたが、その寝室には、見知らぬ顔が12も、14もありました。この場に私を導いた侍女は私に、家のご主人様の前では片膝をついて、この場合には礼儀正しく受け答えをするよう合図しました。そののち奥方様は、まるで一度も私にはあったことがないかのように、私が誰であるか、姓名は何であるか、から質問を始めました。彼女の問いに私が答えると、彼女はさらになんか無意味な質問を加えるのです。それから手紙を書いたり返事をもらったりする仲間がロンドンに誰がいるかどうか調べにかかりました。私はこれに対してロンドンには知りあいとしては、泊めてもらったことがある商人ひとりしかいない、この商人には手紙は書かないし、向こうも私にはまったく近況を尋ねない、と答えました。確かに私はある男を送りこんで彼に友人の外国人が、この商人の家を訪ずれるのを待ってもらい、現在の私の居場所をこの異国の友に伝えてもらおうとしているが、それは私たち二人のあいだに、重要な用件があるからだとも申したてました。夫人はこの答えを聞いて、そばに腰をおろしていた年老いたイギリス人を眺めました。彼はあとで近親者の一人とわかりましたが、その彼は、夫人の耳もとに顔を寄せ、小声でなにか言いました。そ

ののち、夫人は最後の質問を繰り返して言い、私の解答が真実であるかどうか宣誓するよう命じました。私は興奮しつつ真実だと明言したところ、彼女は私の断言に微笑みながら、一人の女性を前に出すよう合図しました。女性は手に一通の手紙を持っていました。老貴族はその手紙をとりあげ広げて、大きな声で読み上げました。手紙が読み終わると、みなが怒りをあらわにして私の顔を見つめます。不平のつぶやき声があがり、そこから私は嘘つきで厚顔無恥だと疑われている、と想像されました。私は自分の無実を確信していましたし、読みあげられた手紙を敵方のなにか新しい戦略と見ていましたので、私はこちら側から、この不愉快な欺瞞に異議を申し立てました。そののち、裁判官の役目をしていた奥方様が、私に立ち上がるよう命じました。彼女は私が立ち上がるのとはほぼ同時に自分も椅子から立ち上がり、老人とほかの二人とで、あらたに話し合いを始めました。そして侍女の二人に、食器戸棚の上にあった銀の燭台で次の間の方を照らすよう命じました。彼女はそのあかりのなかを四人の見知らぬ男たちにつき添われて、小部屋に入って行きました。その小部屋は、私が晩に眠る場所だと思い違いしていたところでした、実際は、私はそこで目をさらのようにはしていましたが。

43. 薄幸の小姓の裁判に、みなはどのように専念したか、また主人のお気に入りの侍女がいかにして小姓を訪れてきたか。

母君の訪問を受けても、私はほとんど動揺しませんでした。すでに予告されていたことですし、悪者から私を守るための命令が、すでに出されたものと信じていたからです。しかし実際は、まったく見当はずれのことになってしまいました。取り調べ官の役をしていた男性たちに、私は自分の櫃を快く開いて見せてしまったのです。見せても、我身に不利益をもたらすようなものが見つかるとは思いませんでした。しかし、なかのひとりがあちこちを見回ったあと、私の服のポケットを探ってみたらどうか、と思ったのです。そして取るに足らないいくつかの書類のなかに、私が主人の従姉妹から最初にもらった手紙を見つけました。手紙に署名はありませんでしたが、その筆跡は、私の裁判を司っていた夫人には知らないはずのないものでした。夫人はしばらく書面に視線をとめてから、私に誰がその手紙を書いたか尋ねるのです。私はそれを確かめるためにそばに寄り寄りました。そしてそれが主人の従姉妹のものだとわかった時、顔が真っ赤になり、ついで真っ青になりました。不幸にも手紙がそのように母君の手に落ちてしまい、恥ずかしく思うと同時に、悔悟の念に襲われたのです。それにしても答えなくてはなりません。逃げ口上を考え出す時間などはありませんでした。だからと言って真実を告白する気にはほとんどなれません。でもついに私は告白しました、それは彼女の親類の女性からきたものだ、と。ところが彼女はそれ以上のことは何も尋ねなかったのです。家の主人は手紙を持って退きました。彼女は従兄の腕に寄りかかって大変低い声で話しかけながら立ち去り、他の連れたち全員がそれに従いました。私も耳だけ彼らについて行ってその話を聞き、とりわけ、私には想像するしかすべのないことを知りたい、と思いました。そして様々なことをいろいろ考え、それらの考えに、私がうち負かされ不安に陥っていた時に、入口にかすかな物音を聞いたのです。私はすぐに扉をあげに行きました。あのアイルランド人がなに

か知らせに来たのだらうと思いましたが、実はそこには、私の主人のお気に入りの侍女がいたので。彼女は小さなろうそくの炎を人目につかないように片手で隠し、そのかすかな光をたよりに私のところまで来て、私が知らなかったいくつかの重大なことを伝えようとしていました。ところが私を守護するために男がひとり、扉の前で寝ていたのです。この男は深く寝入っていました。私を尋ねてきた親切な娘さんは彼に注意していなかったので、私の部屋に入ろうとして足で彼の体にさわってしまい、あやうく顔から床にころんでしまいそうになりました。私は彼女を支えました。しかし、ここに再び障害がかけられたことで、二人ともひどく不安になりました。リダム(こう私は、お気に入りの侍女のことを呼んでいました)は少し気をとり直すと、私が自分の境遇に認められた変化の過程のそれぞれについて、私に話してくれました。彼女の話しによりますと、主人の母君は、二里ほど離れたところに住む親類の一人と、何人かの友人を呼びにやり、騒動の首謀者たちを捕まえるのに強力な援助の手を差しのべるよう、彼らに頼んだというのです。貴族たちは到着し、一方母君は、侍臣とその仲間たちを安全な場所に置いて、彼らを裁判官の手に渡したほうがよいかどうか、その間に見極めようとした、ということでした。そのあと侍女はさらに報告を続け、到着した貴族のなかに、侍臣とはそれほど親しいと思われていなかったが、実は侍臣の一味だった者がいて、その男が侍臣に対しみごとな働きをした、と言うのです。それは当家の従兄弟の、打ちあけ話の聞き役のことでした。この聞き役は侍臣と接触して、侍臣を大胆にもこの難局から引きだし、もし可能なら反対に私をひどい不幸に陥れよう、と申し出たというのです。この男は見せかけの友情関係を利用して、当家の従兄弟に恐ろしい考えをひそかに吹聴しようというのです。すなわち私が、友の親類の娘の殺害のために送りこまれた男であることを証明してみせよう、証拠の手紙ならすぐにも見せることができる、と侍臣に主張したのです。こうして二人は、城の老夫人の頭のなかに私への猜疑心を植えつけました。そして不意をついて私に、ロンドンにいると思われる知合いについて質問することで、私が嘘をついていることを暴くという巧妙な方法を、夫人に思いつかせたのです。彼らは夫人に断言しました、私は夫人の義姉妹の家の誰かと内通していると。そして義姉妹が私を買収した模様で、私を使ってお世継ぎのお嬢様を殺し巨額の富を自分の家に取りこもうとしている、また私は金銭欲につかれて毎日きわめておぞましい計画をたてている、と。私が、非常に重要な用事があってロンドンにある男を送った際、この男に旅の出費についての不満はもらさなかったこと、またこの使者が自身の妻にあてた手紙に、夫人の義姉妹の家の誰かから託された手紙を私に送付したと記していたこと、彼らはこれらを、侍臣あるいはその仲間たちから聞いて知っていました。したがって彼らはこの推測が裏づけられれば、私に十分に嫌疑をかけることができると考えて、使者の妻に手紙を持参させずに出頭させたのです。尋問の際に私が見た彼らの洗面の原因はすべてここにありまして、私の書類のなかにそれを証明するようなものが何かないかと、母君が私の身の回りの品を検査させたのも、これが理由でした。私はそれらの報告を途方もない驚きをもって聞きましたが、話しのあいだ、彼女と私の主人がどうなったかがずっと気になって仕方ありませんでした。リダムの話しはまもなくこの点にさしかかりました。彼女によりますと、夫人の従兄弟の打ちあけ話の相手は、主人たちが私に愛情を抱いていると、私の敵から聞かされたので、知恵を寄せ集

め、また彼らを引き立ててくれる人びとを利用して、主人たち二人の私への心遣いが役にたたなくなるようにした、というのです。彼らはそのために最初に、夫人が娘の気性のやさしさに危うさを感じるようしむけたそうです。娘は、その性と年齢にありがちな度をすぎた憐愍の気持ちから、これほど重大な犯罪の検証であるにもかかわらず無遠慮にも母の邪魔をしてくるかもしれない、と夫人に思わせたのです。それだから善良な夫人は、私の取り調べに専念している間、娘たちを部屋に閉じ込めそこから動かないよう厳命したほうがよい、と考えるようになったのでした。そのような厳しい事態にあってリダムが私のためにやりえたことは、私が少し前に受けとったあの警告の手紙を、アイルランド人を使って私に与えるということだけでした。彼女は中庭にいるこのアイルランド人に、手紙を私に渡して欲しいと合図して知らせたのち、それを窓から投げたそうです。彼女の主人の身に起きた厄介なことについて、また私とはどんな連絡もってはならない、という厳しい命令を犯して彼女がここに来るまでに遭遇した危険について、彼女は私にさらに何度も繰り返して述べました。そして去りぎわに彼女は、忍耐強く知らせを待つよう私に懇願したのです。

44. 薄幸の小姓が囚われの身にあった時に受けた慰め。

この密会のあと忠実なリダムは退出しました。私はあの立派な独房で、困惑した苦難に怒りを感じ続けておりました。夜があけるまで私は歩き回り、ひとりごとを言っただけで何度か大声で叫んだので、私の守護にあたっていた下男が時おりとび起きてしまったほどでした。しかし一晩の疲れがでたのと、虚弱体質だったこととで私は1、2時間ほどとうとうし、夢のそら恐ろしい幻影のなかに入りこんで行きました。それらの幻影は私の恐怖が生み出したものにちがいません。ベッドで身をもがいていた私が目をさますと、熱心で忠実なアイルランド人の姿が目前にありました。私はすぐに秘密の使命をどのようにして履行したか彼に尋ねました。すべては安全な場所にある、しかしそのためには命じられた通りにはやらなかった、というのもこんなに朝早くから城門が開かれるとは彼には思えなかった上、誰かが濠ぞいを当てもなく歩いていて、私が隠しておきたいと思っている物に気づく恐れがあったからだ、このような答えが彼から返ってきました。預かった物は勝手用の中庭の、古い塔を取り壊した時にでた煉瓦や石の、大きな山のなかに隠したので、この件に関して私はまったく心配するにおよばないと、彼から言われました。さらに、もうずいぶん前からリダムと私の主人が奥方様の侍女のひとりをつれており、アイルランド人を控の間に導き入れてくれたのは実はその侍女だったが、この侍女から今度は、奥方様たちの様子をまもなく教えてもらう約束になっている、ということも知らされました。私はそれでいくらか慰められましたが、気持ちが完全に落ち着くまでにはいたりませんでした。これほど辛い不幸を癒すにはもっと強力な治療が必要だったのでしょう。それに私には治るものとはほとんど思えなかったのです。リダムは私と話していても人に見つかることをひどく恐れていましたし、すぐにいなくなってしまうので、彼女に、この事件の仔細を尋ねることも、私の主人がこの危機から私を救い出すためにどのような計画をたてているのか尋ねることも、できませんでした。この危機においては私の無実が明白でしたが、敵の中傷が非常に激しく私をひどく損なうほどのものだったので、私にはしっかりした

支えが必要でした。そういったわけで次のような手紙を、今立ち去ったばかりの侍女にあてて、私は書きました。アイルランド人には、敵の巧妙なやり口を私はまったく恐れていないと誓って述べました。彼に大きな希望を抱かせ、忠実に仕えてくれたことへの報いをさらに強く確信できるよう、私は配慮したのです。

リダムへ

あなたは私の目の前を、稲妻のように通りすぎて行きました。あなたはほんのわずかしか話さず、あなたが現れたのは夢のなかだったのではないかと危ぶまれます。本当にこの私の不運があなたの心を打つことができるなら、私たちの主人の近況を詳しく手紙に書いてこの少年に託してください。私が受けた仕打について彼女がどう述べたか、私の救済のために、と言うよりむしろ私の自由のためと言うべきところですが、彼女がどのように振舞う決心をしたと言っているか、書き送ってください。彼女の奴隷として、またあなたへの愛情に満ちた奉仕者として一生をすごしたい男の言葉を、あなたがうまく説明なさってくださいましたか、心配しています。

45. 薄幸の小姓の裁判の続き.そして牢が変更されたことについて.

あの忠実な使者が私の部屋を出ていくとすぐに、イギリス人の侍女が私を呼びに来ました。あとについて行きますと、控の間で、当家の近隣に住む二人の貴族が歩きまわり、彼らの言う私の裏切りについて、声高に話しあっているのが見えました。彼らは私とともに寝室に入りました。寝室では老婦人が肘掛け椅子に座り、彼女のそばには高齢の従兄弟が座っていました。老婦人たちのうしろには、家の主要人物たちが無帽で立っていました。私は中に進みながら視線をあちこちにやり私の主人とそのお気に入りの侍女がいないか見てみました。そのどちらもないことがわかった時、冷たいものが心にしみこんでいくような気がしました。しかし私は少し思案しました。そしてこの小さな法廷に膝まづき、みなが私に述べなければならないことに、慎み深くしかし毅然として耳を傾けました。善良なる夫人は、私の主人の従姉妹で、亡き夫の姪の書いた手紙を手を持って、私がその手紙を誰から受けとったか正直に告白するよう、私にまず最初に述べました。私が夫人の親類の女性から受けとったことを認めると、夫人は、相手がどのくらいの額を私に与え、どんな約束をして私に憎むべき計画の実行を強制し、私がそれを実行しようと試みたか告白するよう、私をせきたてました。私はどんな計画のことか、と夫人に質問しました。すると夫人は財産を狙う人びとに頼まれ、娘を不幸にも暗殺する計画のことだ、と答えましたので、私は、それは間違っていると夫人に抗議しました。そして、それは敵たちがでっあげた中傷で、私を失墜させようとしたためだ、と申し添えました。しかし夫人は頭を振りながら、尋問を続行するのです。夫人は、手に持つ手紙が愛情に満ちた文体で書かれ、身分の高い人の手によるものだと指摘し、私の近況を急いで知りたがっている様子がここに表れ出ている、と述べるのです。私がかかなり重要な案件で彼女と共犯関係にあることが容易に判断される、と夫人は言いました。夫人からこの関係について答をせきたてられた私は、その時、ひどい仕打ちに脅え、またそれを恐れるあまり持ち続けていた、礼儀にか

なった羞恥心をもう捨てることにして、彼女の親類のお嬢様の私への愛情を明らかにすることにしたのです。私は率直に申しあげました、当家の親類のお嬢様は私に愛情をお示しになり、私が瀉血された日に白いスカーフを贈ってくださったこと、それが彼女から受けとった贈り物のすべてであることを。また彼女が、当家のお嬢様に対し何か悪いことを私に企てさせようとしたことなどまったくなかった、私の敵たちが誤って出すぎたことをしたが、しかしおそらく彼女は、私を引き抜いて彼女に奉公させたかっただけだろう、と述べました。また、彼女は私の言葉が好きだと言っていたから、私から生粋のフランス語を習おうとしたのだろう、それが彼女にこの手紙を書く気にさせた唯一の理由なのに、みなは私にひどく不利な説明をつけようとするのだ、とさらに申しました。ここまで話したのち、私は自分の無実と当家の親類の無実の証人として神の名を呼び、この家の人びとはかくも憎むべき憶測によって親類の名誉をけがしている、犯人を手厳しく罰さなければならぬ、と述べました。奥方様は、その時椅子から立ち上がって老いた従兄弟の手をとり、窓際まで行って彼と話しあいを始めました。二人だけの秘密の相談が終わると、家の管理人が呼び出され、建物全体から切り離されて建てられた古い塔に私を連れて行きました。ここは、それまで私がいた小部屋よりもずっとゆったりしていました。広々とした寝室がいくつもあって歩き回ることができたうえ、下の出入口まで階段を自由に行き来することもできたのです。下の出入口は私の目で何度も鍵が回されて閉ざされました。そして私はこの場所で体験させられました、焦りを感じているときの時の流れがどれほど遅いものか、またいつまで幽閉されるか知れない時に、人はどれだけの不安を感じるものか。不運をいくど嘆き、いくど髪をかきむしったあとのことでしょうか、ようやく扉の開く音がしてその直後に、食膳係とあのアイルランド人が昼食を持って階段を登ってくるのが見えました。私は自分の召使の顔を見ていくらか慰められましたが、運ばれた肉は私の糧にはなりません。私は多少であれ肉などを食べようとは思いませんでしたから、それほど私は毒を恐れていたのです。しかし私は、食膳係に対する不信感はまったく表に現しませんでした。彼は、私が疑念を抱く人びとの一味ではありませんでした。私はアイルランド人を通訳に使って食膳係に、私のために骨折ってくれたことに感謝している、と伝え、彼に私への尽力をさらに頼めるかどうか尋ねました。こう述べたあと私は彼を抱擁し、少々拒まれはしたものの、金貨2、3枚を彼に渡しました。このようにして食膳係を買収したのち、私はアイルランド人を離れたところに連れて行って主人の消息を尋ねました。この忠実なる召使は、リダムの配慮により昼食を私のところに運んだと私に伝え、彼女が台所で指示を与えながら巧みに彼に託した手紙を、私の手に渡してくれました。私は彼の忠実さをたたえたあと、町でパンを少し手に入れるよう、私に会いに戻ってくる時にそれをポケットに入れて持ってくるよう命じました。彼もその証拠を見たとおり、この家で調理された肉に対してはどれにも、ひどく不審の念を抱かざるをえない深い理由があるのだ、と私は言い添えました。そしてひとりになるやいなや、送られてきた手紙を開封しました。それはおおむね次のようなことが記された手紙でした。

あなたの敵方の悪意ほどおぞましいものを私は存じません。理性の力に訴え、誹謗の力に逆らう

ことは、今までのところ不可能でした。ご主人様と私は努力を重ね、不当にも抹殺されそうなあなたの無実を主張してまいりました。しかしそうするなかで、私たちは涙も言葉もほとんど使いはたしてしまいました。あなたをお助けするために私たちができたことのすべては、あなたを裁判所の手に渡すのをさらに遅らすことだけ、でした。その決定が今にも下されようとしていたからでございます。ぜひお考えになってくださいませ、もしあなたがまったく庇護されていなかったら、あなたの悲惨は、そして私たちの悲惨はどれほどのものになったかを、またどのような危険をあなたが冒すことになったかを。ですが絶望してこの迷宮から脱出できないのではないかと、などとはお思いにならないでください。私たちのご主人様は、伸るか反るかの大勝負をする決心をなさいました。私はあなたについても、ご主人様の行き過ぎた愛情についても何も心配していません。ご主人様が、短気をおこしてあやうくすべてを水泡に帰してしまいそうになったことはすでに2、3度ありましたが。

ああ、この手紙はなんと感動的なのか、なんと様々な情熱を次から次へ私に感じさせるのか、と思いました。手紙を読みながら私は敵方の悪意を目の当たりにし、怒りのあまり歯ぎしりをしましたし、主人の変わらぬ愛を認め、恋するゆえのため息をつきました、また恐怖のあまり血の凍りつくような思いにさせられる材料もありました。そしてそれらすべての中に、希望のたねもいくつか宿っていて、それが恐怖と苦痛で混乱した心を鎮めてくれたのです。

46. どのようにしてリダムが、薄幸の小姓を牢から出しにきたか。

私は一日じゅう受け取った手紙を読み返して過ごしました。文面に、他に増して苛酷な意味を持つところ、また特に好都合なところを見つけては考えを巡らせました。そして運ばれてきた肉料理の一片を窓から外に投げ捨てることにもっぱら心を奪われていました。魚やアビ⁽⁶⁾にぶつかった肉片が、濠の水に沈んで餌となるのを窓越しに見つめていたのです。夕方になると私の召使が、食事を持った食膳係を伴って戻ってきました。私は召使を階段の方へ呼んで話を聞き、その間、食膳係が食卓の用意をしました。私の召使は最初にポケットから屋敷の外で手に入れたパンひとつと白い布にくるんだ肉を取りだしました。肉は私の主人のお気に入りの侍女が、手紙とともに私に届けさせたものでした。手紙にはこのように記されていました。

私たちのご主人様はある計画を目論まれましたが、それには私同様あなたもご賛同なさいますまい、きわめて潔い計画ではございますが。結末はよさそうに思えても、実行するのが非常に難しいと考えられました。今晚お目にかかってさらにお話し申しあげたいと存じます。どうか悲しまないでくださいませ、希望はもうほとんど失せてしまいましたが、しかし絶えたわけではございません。

二人の召使がたち去ったあとで手紙を読みなおすと、すこし元気が出てきました。リダムが良い知らせを持って戻るよう、あるいは少なくとも、私がこの塔を抜け出し安全な場所に逃れるための

良い策が二人でみつけられるよう、願いました。こう楽しく考えながら、私は毒の心配がない食べ物を食欲旺盛に食べたのです。その後、様々なことを考えながら少し歩きまわり、用意してあったベッドに身を投げ出しました。どんな小さな物音でも目が覚めるよう、それほど深い眠りには落ちこまないことにしました。ところが私は、リダムが近づいて私の腕を引っ張らなければ、まどろみから覚めなかったのです。気高く忠実なあの友は、この時、良天使が現れるように私の目前に姿を現しました。彼女は部屋を訪れて私を驚かせましたが、苦しみを和らげてくれたのです。彼女は手に小さな龕灯を持っていて、その覆いを半開きにし光をあてて私が見分けられるよう、また私が驚かないようにしました。それから、彼女は小声で私に次のように言いました、それほど、彼女は夜の静寂のなかで人に話し声が聞かれるのを恐れていたのです。

「ねえ、アリストン、私がどんなにしてあなたとの約束を守ったかわかってちょうだい。ここに来るのに大きな危険を冒さなかったわけではないよ。人に見られるかも知れなかったわ。もしこの家の下々の者たちに姿を見られたりしたら、私は完全に終わりですもの。」

私は彼女の手を取り口づけをして、彼女の善意に対し感謝の念をやさしく示そうとしましたが、彼女は私にそれを許し与える気はなく、このように言葉を続けました。

「私が、人ずてでお届けしたあの手紙で示唆申しあげたことを、あなたは考えてみようとなさいませんでしたね。よくはおわかりにならなかったのですね、私たちのご主人様があなたのためにこの世でもっとも無謀な選択をなさろうとしたことを。もし私が助言さしあげてご決意を変えていただかなかつたら、恋に狂った女となって今ごろ、母上の足もとに身を投げ出しにお出かけのところまでございました。ご主人様が愛の誓いをあなたにお与えになり、またあなたも愛の誓いをご主人様に与えて、以後永遠にお二人が一つに結ばれたのだ、とご主人様は母君に言明なさろうとしたのですよ。ご主人様がそう行動すれば、あなたはご主人様と内密に結婚したということが、公になったのでございます。その場合、考えてもみて下さい、母君がどれほどの混乱に陥ったかを。母君はこの国の名門中の名門と言われる家のひとつのお出ででいらっしやいます。多くの伯爵がたからの婚姻の申し出を退けて、お嬢様には伯爵以上の高い身分のかたをお相手にお望みです。もし娘が母親の関知しない間に夫を選び、それがあなたのような見ず知らずの外国のかたと母君が知ったら、母君がいったいどうおなりになるか、考えてもみて下さい。」

それまで希望をいかに高く抱いていたとはいえ、私はこの言葉を聞いてからは茫然自失してしまいました。そして彼女が話しを続け、こう断言した時は困惑の度をさらに深めたのでした。私が王子に生まれついているとはいえ、一門のかたたちは私の身分に対して最初に感じた怒りを抑え切れず、私をいかさま師だとしてすぐに亡き者にするだろう、と彼女は言ったのです。私は泣きながらそれが真実であることを認めて、私の主人の無謀な愛情を非難し、そのお気に入りの侍女の慎重さを称賛しました。しかし、リダムは私に大きな決断を下すか否か、考えなければならないと言うだけでした。それは、私がひとりで脱出すべきか、主人とともにか、ということでした。主人は二人で逃げるために私の衣服を一枚欲しい、また宝石が詰まった小箱を私に託したい、と言っているそうでした。リダムはこう述べながら微笑むように私を眺め、主人のこの提案が馬鹿げていることを、

その笑みで私にはっきりと伝えました。私も彼女と同じ考えでしたので、彼女に両手を合わせて懇願しました、もし彼女が彼女の主人を愛しているなら、私たち全員にとってきわめて不吉なその望みを主人に捨てるよう説得してほしいと。友も共謀者も持たない異国人が、治安が非常に良く、どの港も照明がよく整ったこの国で、罰を受けずにそんなに重大な行為ができるはずはないのです。

一緒に長いあいだ相談した結果、私がアイルランド人だけを伴ってひとりで逃げることになりました。彼が私をスコットランドまで導き、そこから彼の国に私を逃がしてくれることになったのです。一方、彼女は主人に、私がどこかの港で船を手に入れて、出帆の用意が整ったら主人を連れにくる、その時は男装して逃げるのだ、と話しておいてくれることになりました。私はその時リダムに、なぜ出発をそれほどせかせるのか尋ねました。そして彼女から、地方裁判官にあたる人が翌日、私を捕えに来るはずだと聞いたのです。私たちはゆっくり話す時間がなかったのです。またそのうえ彼女とともに主人も、もし母君がどういう風の吹きまわしか、娘を自分の寝床に寝かそうとしなかったら、私に会いに来るはずだったことも彼女から聞きました。それに、彼女が門番を買収して相当な金が門番に渡ったので、私は都合のよい時に外に出られること、門番の不忠を覆い隠すために、また私の脱獄方法をカムフラージュするために、寝室の濠側の窓に敷布を結びつけておくことが、彼女と門番のあいだで取り決められていると知らされました。私にはこの方法が世界で一番良い方法に思えました。そしてすぐに麻の敷布を窓にくくりつけ、リダムとともに塔を出たのです。中庭にはアイルランド人がいました。一晩じゅうそこにいるよう命じられていたのです。あの忠実な召使は、廃屋に隠しておいた私の鋼鉄製の小箱を忘れずにみつめてきてくれました。リダムは私を城外に出すと、何とか方法を見つけて安全な場所に身を落ち着けて欲しい、そして近況を知らせて欲しい、と涙に泣きぬれて私に懇願するのです。私は少し考えてから、彼女にパンと飲み物が手に入るかどうか尋ねました。私の計画にはどうしてもそれらが必要だったのです。彼女はアイルランド人とともに門番の部屋に引き返し、それらを持って戻って来ました。私はそこで彼女に別れを告げ、かならず近況を知らせると約束したのです。また翌日城内で起きるだろうことを知らせてもらうためにも、私の連絡場所をあとで教える約束をしました。そのために、門番に門を閉めないでお願いしよう彼女に頼んだのです、遅くとも二時間後にはアイルランド人を戻すから、と言って。

(第一部終了)

註

- (1) イングランド南西部、イギリス海峡に臨む港町。1620年、メイフラワー号がここからアメリカにむけて出帆した。
- (2) 当時カナダにあったフランス植民地の総称。
- (3) 熱帯地方産のマメ科の常緑樹。花は肝臓疾患に効き目があるとされる。
- (4) 北方の海に繁殖するアビ科の鳥の総称。鉛の塊のように水中に沈む。